

---

# 桜並木

深月姫季

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜並木

### 【Nコード】

N3739M

### 【作者名】

深月姫季

### 【あらすじ】

中学校の卒業式に向かう蘭と新一の姿を描いた短編です。

「ふあああ……」

新一の大あくびに、隣を歩いていた蘭が少しふてくされた。

「どうせ、また夜遅くまでホームズ読んでたんでしょ？」

「ああ… ホームズはすげーよ、やっぱり… ライヘンバッハの滝でのホームズの選択は…」

途端に顔を輝かせ、語り始めた幼馴染。蘭は墓穴を掘った己のミスに気付いた。とにかく、この幼馴染はホームズのことになると話が止まらないのだ。

慌てて、話題を変える。

「そう言えば、今日新一のお父さんとお母さん、来るの？」

今日は、義務教育最後の日。二人はきちんと正装をしていた。ほとんどの生徒が同じ高校に進学する為、あまり哀しいという感覚はない。

新一は話を遮られても大して怒った風でなく、特に興味なさげに答えた。

「ああ、俺は別に来なくていいっていったんだけど、母さんが来るって聞かないから… 蘭のトコは来るのか？」

母親が出て行って別居中の蘭を気遣うように尋ねる。

「うん、電話で喧嘩してたけど。お父さんはお前は来るなって言ってるし、お母さんは行くって譲らないし。結局二人で来るみたい」

「…今日で卒業、か」

「うん…」

遠くに見える校舎を見て、新一がしみじみと呟いた。蘭は3年間自分を見守ってくれた、大好きな桜並木の下で深呼吸した。

弥生の末。

今年は暖冬のせいか、珍しい事に桜が既に満開を迎えている。

強風に煽られて、蘭の髪が流れるように靡く。

髪の毛を払うと、青空が一面に広がって、アスファルトの上には、薄桃色の桜の花びらが、自然のカーペットを作っていた。

蘭はしばらくその幻想的な世界に見とれていた。桜同士が擦れ合い、サワサワと音を立て、  
風が悪戯に花びらを舞い上げる。

「おい、蘭、何止まってるんだよ」

隣を歩いていたはずの幼馴染が、数メートル前方で痺れを切らしたように声を張り上げた。

「新一もおいでよ。ここ、桜が舞っててすごく綺麗だよ」

「バーロー、残念ながら、んな暇ねーよ。遅刻するぞ、卒業式」

その言葉に蘭は反射的に時計を見た。

「あつ…いつけない…」

集合時間が十分後に迫っていた。この桜並木から、どう急いでも七、八分は掛かってしまう。

「ほら、走るぞ」

タタツと駆け戻ってきた新一に手を掴まれて、蘭の頬が紅潮する。新一の顔をチラリと見ても、あつちには照れる様子が無いのを、少しもどかしく感じた。

「ちょ、ちょっと新一」

「ほら、早く早く」

本当は新一の方は、必死にポーカーフェイスを装っていたのだが。

二人は桜の中を走りながら、それぞれに頬を綻ばせていた。

お互いが、まだ告げることの出来ない感情。

お互いを、特別に思いやる気持ち。

それはまだ、幼く、恋愛に疎い二人は気付かないけれど。

それでも二人は、既に心の奥、深いところで繋がっているのかも  
しれない。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3739m/>

---

桜並木

2010年10月8日13時05分発行